

# 現代ロシア語における「ソビエト語」と卑俗語： グセイノフ著『1990年代のロシアのディスコースに おけるイデオロギー素』に関する読書ノート\*

高橋 健一郎

1. ロシアでは、1980年代半ばのペレストロイカ期以降、社会のイデオロギーの転換に伴い、ロシア語がどう変化しているのかという問題をめぐりさまざまな議論が言語学やその他の分野でなされている。なかでも、ソビエト・イデオロギーを反映しているとされる「ソビエト語」、「ニュースピーク」<sup>1</sup>などに関する研究はすでにかんがりの蓄積があり<sup>2</sup>、またソ連崩壊後増えてきた新語や新しい言語現象に関する研究も多い<sup>3</sup>。

本稿で取り上げるのは、2004年に出版されたガサン・チンギゾヴィチ・グセイノフ（Гасан Чингизович Гусейнов）<sup>4</sup>の『1990年代のロシアのディスコースにおけるソビエトのイデオロギー素』（Г. Ч. Гусейнов «Советские

\* 本研究は平成17年度札幌大学研究助成制度による研究成果の一部である。

<sup>1</sup> 「ニュースピーク」とは、ジョージ・オーウェルのアンチ・ユートピア小説『1984年』の中で人々の思考をコントロールするための道具として描かれた新しい言語 Newspeak のことであり、ソ連をはじめとする全体主義的な社会の言語一般に関しても用いられるようになった。ロシア語では новояз という。

<sup>2</sup> 「ソビエト語」の研究史については、拙論（高橋2002、高橋2004、高橋2005）を参照されたい。

<sup>3</sup> 代表的なものに、Русский... (1996) がある。

<sup>4</sup> ガサン・チンギゾヴィチ・グセイノフは1953年バクーに生まれ、モスクワ大学で文学博士候補、2002年にはロシア国立人文大学で博士号を取得。1984年より科学アカデミーの世界文学研究所で研究に従事。1989年の論文「意識状態としての虚偽」（『哲学の諸問題』1989年第11号）でいち早く「ソビエト語」の問題について触れているほか、本書のほかにも『20世紀の社会政治言語のロシア語辞書の資料』（モスクワ、2003年）、『われらが祖国の地図：言葉と身体間のイデオロギー素』（ヘルシンキ、2000年）その他、言葉とイデオロギーについての著者がある。

идеологемы в русском дискурсе 1990-х» М.: Три квадрата) である。これはソ連崩壊後のロシア語における「ソビエト語」の要素を主要なテーマとしたものである。もちろん、これまでもこのようなテーマの研究が無かったわけではない。例えば、この問題を真正面から扱ったものに言語学者ゼームスカヤによる論文「ポストソビエト社会の言語におけるニュースピークのクリシェと引用」がある<sup>5</sup>。

ゼームスカヤは、ポストソビエト時代のロシア語における「ソビエト語」の機能を次の三つにまとめている：

- 1) パロディー、嘲笑の重要な要素；
- 2) 過去から引き継がれた真面目なお役所言葉の要素；
- 3) 日常語の中で発せられる「ソビエト語」の残滓で冗談の意図を伴わないもの（ソビエトのメンタリティーの特徴が多く話し手に残っていることを示している）<sup>6</sup>。

その中で特に重要なのは、「ソビエト語」のクリシェ（良く知られたスローガン、指令、マルクスやレーニンの論文の名称その他）が、多くの場合アイロニーを伴い、パロディーとしてさまざまにデフォルメされて用いられ、現代の評論において表現性を高める手段として頻繁に用いられることである。それは特にインテリゲンツィアや若者たちの間で用いられる *стёб*（嘲笑）と呼ばれるジャルゴンに顕著に見られる現象である。

また、1998 年に書かれた言語学者クロンガウスの論文「言葉のクリシェ：破裂のエネルギー」<sup>7</sup> も、基本的には「ソビエト語」のクリシェをデフォルメすることによってユーモアが生み出されるという現象を扱ったものであり、ゼームスカヤの論考と同じ系列に属する。

<sup>5</sup> Земская (1996).

<sup>6</sup> Земская (1996: 28).

<sup>7</sup> Кронгауз (1998).

このように、ソ連崩壊後の1990年代になっても、「ソビエト語」という問題は必ずしも過去の遺物とはなりきっておらず、現代ロシア語の中にさまざまな形で残っていることが分かるが、それはこれまで主として「パロディー」という側面のみに焦点を当てて論じられてきたに過ぎず、本格的にこの問題が深く掘り下げられてきたわけではない。そのような中であって、本稿で取り上げるグセイノフの著書は、これまで扱われてこなかった範囲の問題まで考察されている点で非常に貴重な研究と言える。以下、おおよその内容をまとめてみよう。

2. 本書では、イデオロギーと言語に関する理論的な問題が第1章「ソビエト・イデオロギーとポストソビエトのディスコース」（«Советская идеология и поссоветский дискурс»）で論じられた後、第2章「イデオロギー素：文字から引用まで」（«Идеологема — от буквы до цитаты»）で現代のロシアの活字メディアや口頭の言葉などさまざまな言語資料を基にして、ポストソビエト時代のロシア語のディスコースにおいてどのように「ソビエト語」のイデオロギー素が機能しているかがさまざまなレベルで検討される。そして、第3章「イデオロギー的言語の卑俗語の層」（«Матерный пласт идеологического языка»）では、卑猥な俗語とソビエト・イデオロギーとの関係が論じられる。

まず、グセイノフの分析の基礎となる理論的な部分を確認しておきたい。第1章「ソビエト・イデオロギーとポストソビエトのディスコース」では基本的ないくつかの概念が定義づけされる。「ディスコース」、「イデオロギー」、「イデオロギー素」、「ポドテキスト」などに関して簡単に整理しておこう。

グセイノフによれば、「ディスコース」というのは、「開かれたタイプの社会的コミュニケーションであり、言葉による象徴交換の一つの方法である。その象徴交換の際、母語話者は、任意に与えられる知識や表象の流れに前提条件なしに身を浸しながら、つねに全般的な世界像に言葉の再調整（『再構成』や『批判』）を加えるのである」（13）<sup>8</sup>。

<sup>8</sup>（ ）の中の数字はグセイノフの著書の参照ページを意味する。以下同じ。

「イデオロギー」という概念に関しては、グセイノフによって大きく二つの語義が検討される。一つは、簡単に言えばソビエトにおけるマルクス・レーニン主義の教理のような、権力によって広められた教えのことである。「ソビエト語」研究には、ソビエトのイデオロギー体系を反映した語彙の語義を記述した研究が多いが、その基礎にあるイデオロギー観は、このような「思想体系としてのイデオロギー」というものであろう。

しかし、グセイノフはさらにイデオロギーの動的な作用、「イデオロギー作用」とでも言うべき側面に注目する。それは、マルクスの「虚偽の意識」の状態に近い意味を持つものであり、予言の要素が科学的な方法論と結びついた形で提示されるものである。それは単に所与の「思想体系」として存在しているのではなく、支配者に正統性を与え、支配者の政治的影響力を権威に転化させるものであろう。そして、それはマスコミュニケーションの発達に伴って、「危険な社会的な道具」ともなるものである (18)。

「ソビエト語」の議論の中で、「イデオロギー」のこの二つのレベル（つまり、「観念体系」と「固定化・正当化機能」）の存在を意識することはとりわけ重要であるように思われる。前者のイデオロギー観のみだと、所与の公的な思想体系の内容を確認するだけに終わってしまい、イデオロギーのもつ動的な作用を見落としてしまうからである<sup>9</sup>。

グセイノフはここで「イデオロギー的言語」(идеологический язык) と「イデオロギーの言語」(язык идеологии) の違いに注意を促す。「イデオロギー的言語」とは「イデオロギーの言語」と同義ではなく、さらにその「イデオロギーの言語」から身を守る「自衛の言語」(язык самообороны)<sup>10</sup>をも含んだものとされる (28-29)<sup>11</sup>。であるから、「イデオロギー素」も上記のような

<sup>9</sup> 拙論 (2005) 第 I 部を参照されたい。

<sup>10</sup> 「自衛の言語」とはグセイノフが注で記している通り、ポーランド出身の言語学者アンナ・ヴェジュビツカ (Anna Wierzbicka) の用語「言語的自衛」(языковая самооборона) に基づいたものである。Вежбицкая (1993) を参照のこと。

<sup>11</sup> ただし、この区別は本書の中で必ずしも厳密に守られているわけではなく、「イデオロギー的言語」を「イデオロギーの言語」の意味で用いている箇所もある。

「ソビエト語」の要素だけではなく、例えば «совдепия»（「ソ連」の蔑称）、«большевизан»（「ボリシェヴィキ」の蔑称）などの反ソ的な言葉も含まれるとされる。このように、本書では体制側の公式言語とそれに対抗する言語の両方を同時に視野に入れた研究が目指されていることが分かる。

そして、直接的な発話の言語分析と異なり、イデオロギー的言語の分析に際して必要不可欠なのは、言外の隠れた意味である「ポドテキスト」（подтекст）という概念であるとされる（14）。「ソビエト語」に関する代表的な論考の一つであるクロンガウスの論文「成熟した社会主義の時代における言語の無力」<sup>12</sup>によれば、70年代以降のソビエト・ロシアにおける「ソビエト語」の最大の特徴の一つは「脱意味化」（десемантизация）であった<sup>13</sup>。つまり、言葉の外皮とプラスかマイナスの価値評価だけが残し、語の実質的な意味は失われてしまい、言語の「儀式化」が進んだのである。しかし、これは言葉の意味がまったく無になったということの意味するわけではない。むしろ、多くのイデオロギー素が一見空虚な記号となったがゆえに、さまざまなポドテキストがそこに付随するのである。

そして、イデオロギー的言語は多くのソビエト市民にとって思考や行動の指針となるある種の統一体、「超テキスト」（сверхтекст）を構成しており、その「超テキスト」は「イデオロギー素」を抽出することによって示すことができる（22-23）。本書のタイトルの一部をなすキーワードとしての「イデオロギー素」（идеологема）は、グセイノフの説明によれば、まず書かれたテキストや話される言葉の最小限の断片、モノやシンボルであり、それを「発する／受けとる」「書き手／話し手」や「読み手／聴き手」が（直接、間接に）「メタ言語」（つまり、社会が従うべき規範的な世界観や根本的なイデオロギー的志向などの想像上の集合体）を参照してしまうような仕組みをもつものである。簡単な例を挙げれば、「コルホーズ」、「英雄都市」、「息子は父親の責任を取ら

<sup>12</sup> Кронгауз (1994).

<sup>13</sup> Кронгауз (1994: 240).

なくてよい」<sup>14</sup> などのように、それを聴けばすぐにソビエト・イデオロギーの言語世界に結び付けられるような言語要素のことである (28-29)。

イデオロギー的言語の超テクストを構成することができるのは、イデオロギーの言語と、そのイデオロギーに抵抗する言語の両者である。グセイノフが第1章で挙げている例を見てみよう (30-31)。それは「自由結婚」(гражданский брак) というイデオロギー素の超テクストである。それには三つのレベルがある。

一つ目のレベルは、辞書的な意味記述であり、それはこの結婚の公式的な定義と一致する。

①「自由結婚に関する指令が1917年12月31日に出された」(ポケット辞典、1926年、98頁)

「国家権力の当該機関において教会の関与なしに手続きされた結婚」(ソビエト百科辞典、1989年、336頁)

さらに、このイデオロギー素を自分自身の経験の中で身に着けた同時代人による中立的な記述も超テクストの一部を構成する。

②「それからグリシュカ・フョードロフはポレチカ・ナソノヴァと結婚した。二人の結婚式は、スピーチがあり、祝辞があり、戸籍簿への登録があり、と典型的なコムソモール式の結婚式だった。その後、司祭に式代を払う必要があるか、そしてどういう結婚式の方がいいのか、という議論があった。私自身は、どんな結婚式も必要ないと決めた。[……] 他人がいたり、いろいろな「手続き」があることで、人間の尊厳が貶め

<sup>14</sup> この言葉 (Сын за отца не отвечает) は、1935年12月1日の先進的コンバイン運転士大会において、コンバイン運転士が「私は富農の息子ではありますが、労働者と農民の事業のために、社会主義建設のために誠実に闘います」と述べたのに対してスターリンが述べた言葉である。

られるとさえ思えたからだ。まるで結婚が取引のようになってしまっているのではないかと。[……]」

「『自由』結婚はそのとき [1921 年] 法制化され、それは何よりも父と母を喜ばせた。自由結婚は夫婦が経済的、法的、その他の面で完全に独立することを意味するからだ。法的にはこのような結婚は、互いの行動に責任を持ったり、権利や財産などを引き継いだりすることを人々に強要することができなかったのだ。しかし実際には、弾圧の犠牲になったのはみんなだった。『自由』結婚した夫婦だけではなくて、みんなだったのだ（隠れたり、身をかわしたりしなかった者、あるいは迫害される者を単に知っているというだけで、あるいは知らない人も犠牲になった）。母は自分の夫に対して、最大限の責任を取り、最大限の苦しみを味わった。」<sup>15</sup>

それから、さらに「抵抗の言語」の産物も超テクストの一部を構成する。

③「党細胞はサショークを結婚させた。署名した。（当時のからかい言葉では『納戸のバックスタイルの自由結婚によって』«гражданским браком — в сарае раком»<sup>16</sup>）。

超テクストの意味レベルはこれらのテクストに基づいて再構成することができる。出発点は公式的な見解としての①であり、それを实际的に解釈し、受け入れるのが②、そしてそれを完全に拒否するのが③。このようにして、グセイ

<sup>15</sup> この記述はこれだけではわかりにくいですが、この書き手の両親が自由結婚し、当時はそれにより夫婦が互いの行為に責任を取らなくてもよかったはずが、結局、夫（書き手の父）の何らかの「罪」の責任を妻も取らされたということ。

<sup>16</sup> これは韻を踏んだからかい言葉だが、「納戸の中での四つんばいの体勢での性交」という卑猥な意味になる。

ノフは「自由結婚」というイデオロギー素の「ポドテキスト」の意味の層を次のようなリストにまとめる。

- 1) 公式的な理由：教会の束縛から家族を解放する
- 2) 隠れた公式的理由：私有関係の廃止（2'：相続者のない遺産を国有財産とすることができる）
- 3) 小集団〔家族〕の理由：経済的な独立
- 4) 小集団〔家族〕の隠れた理由：弾圧からの逃れ
- 5) 俗語的な反ソ的公式：野蛮さ（31）

このように、グセイノフの戦略は、形骸化したように見える「ソビエト語」の「イデオロギー素」にまわりつくさまざまな「言外の意味」（ポドテキスト）を、ソビエト時代やあるいはポストソビエト時代の現代のさまざまなディスコースを題材にして丹念に読み解いていくというものである。それは言語学や記号論などの成果を利用したものであり、イデオロギーの言語の環境の中で生きてきた母語話者としての言語感覚を最大限に用いた分析である。

3. グセイノフは第2章「イデオロギー素：文字から引用まで」（«Идеологе-ма — от буквы до цитаты»）において、文字、発音からテキストにいたる言語のさまざまなレベルのイデオロギー素を取り上げる。「ソビエト語」研究において、これだけ幅広い言語現象を同時に取り上げる例はこれまでほとんどなかった<sup>17</sup>。以下、簡単にまとめておこう。

はじめに取り上げられるのは、«ъ»、«б»（小文字）、«н»、«ё»などという文字のイデオロギー素である（45-59）。

<sup>17</sup>「ソビエト語」に関する上記のクロンガウスの論文では、「ソビエト語」は音素のレベルからテキストレベルまであらゆる言語レベルで観察できると主張されているが（Кронгауз 1994: 239）、そこでは具体的な分析がすべてのレベルにわたってなされているわけではない。



語末の«ъ»をはじめとしていくつかの文字が1918年の正書法改正によってロシア語のアルファベットから排除された。正書法の改正自体は革命前から革命勢力とは別に言語学者たちによって議論されていたものであり、本来は革命とは関係ないのだが、1918年に実施されてからはそれは民主主義的な言語の簡略化志向や、また世界全体を革命的に変革しようという時代の雰囲気に応じたものとみなされるようになる。その中でこれらの排除された文字は「忌まわしい過去の遺物」と捉えられ、その意味で「イデオロギー素」となるのである。そして逆にペレストロイカの時代には、市場経済にちなんだ時代のキーワードとしての«банкъ»（銀行）、«коммерсантъ»（実業家）という単語の末尾に«ъ»という文字が使われるようになり、再び別の意味での「イデオロギー素」となった。

そのほかに、«б»という文字がイデオロギー素として機能する例が挙げられる。ソビエト時代は「神」を表す語を大文字で«Бог»と書いてはならず、小文字で書かなければならなかったことはよく知られているが、ほかに、日常の話し言葉の中では«б»という文字は«блядь»（売春婦）という単語を婉曲的に示すものでもあり、«ВКП(б)»（全ソ連邦共産党（ボリシェヴィキ））の括弧の中の「ボリシェヴィキ」という「崇高な」語のポドテキストとして「売春婦」という意味が存在することなども示される。

文字に関しては、ほかにエストニアの首都タリン（Таллин）の«н»をロシア語風に一つだけ書くか、あるいはエストニア語風に二つ書くか、という選択がイデオロギー的なシグナルとなる例のほか、また1942年12月24日に教育人民委員会の決定で、学校では«ë»という文字を使わなければならないとされたことや、その後«ë»を使わなくてもよくなった時代にもソルジェニーツインが使い続け、イデオロギー的なポドテキストを形成していることなどが論じられている。

また、イデオロギー素として機能するのは個々の文字ばかりではない。ソ連邦の非ロシア民族にとっては、ロシアのアルファベットそのものがマクロなイデオロギー素として機能した。1918年の正書法改正以降、一種の反ロシア的

な風潮が起こり、ロシアのアルファベットをキリル文字からローマ字に切り替えようとする動きすらあったが、1930年代末までにはそのような動きは落ち着き、そのときまでにローマ字化されていた諸民族のアルファベットがキリル文字に変えられた。このような動きの中で、アルファベットそのものがイデオロギー素として機能していたのである。

また、個人の発話の癖や訛りなどがイデオロギー素となる例も示される。発話特徴がロシアの政治史の中でイデオロギー的な価値をもつようになったのは、もちろんラジオや映画、レコードなどといった音声メディアが発達し、それらを通じてソビエト政権が国民に語りかけるようになってからのことである<sup>18</sup>。

興味深いのは、第二次大戦ごろから、ソビエトでは標準化志向が強くなり、それまでスターリンの役を演じる役者がスターリンの発音を真似てグルジア訛りで話していたのを、モスクワ式の発音の役者と交代させられたというエピソードである (61)。その頃から、マスメディアではモスクワ発音が規範とされ、他の地方の訛りが一定のイメージをもつようになっていったことが分かる。

4. 語彙・文法レベルの言語要素もイデオロギー素として機能する。まず、格語尾のイデオロギー素として、グセイノフは二つのヴァリエントを取り上げる。一つは公式的な政治レトリックの現象であり、もう一つは体制側の言語の誤りを言語感覚の鋭い者（この場合ソルジェニーツィン）が暴くというものである。

前者の例としては、東西ドイツのロシア語の名称 «ФРГ (Федеративная Республика Германии)» (ドイツ連邦共和国：西ドイツ)、«ГДР (Германс-

<sup>18</sup> このレベルのイデオロギー素に関しては、上記のクロンガウスの論文でも触れられている。例えば、フルシチョフは социализм や капитализм という語を социализъм, капитализъм のように з を軟化させて発音し、それを民衆が真似た (Кронгауз 1994: 239)。

кая Демократическая Республика)»（ドイツ民主共和国：東ドイツ）が挙げられる。東ドイツで用いられていたドイツ語では、それぞれ《Deutsche Bundesrepublik》（西ドイツ）、《Deutsche Demokratische Republik》（東ドイツ）と呼ばれていたが、文法的には「ドイツの」（Deutsche）という形容詞が「共和国」（Republik）を修飾しており、その意味において言語的レベルでは両者は対等な関係を保っている。それに対して、ソビエトで用いられていたロシア語名称では、東ドイツの方は「ドイツの」という形容詞が「共和国」を修飾しており、ドイツ語名称と同様であるが、西ドイツの名称は、「ドイツ」（Германия）という名詞が「生格」で置かれる（形容詞ではない）。このように、「ドイツ」という名詞が生格で置かれることによって、「ドイツに二つの国家が存在する」というポドテキストが生まれ、その意味で「ソビエト語」においては言語的に西ドイツだけが地位を貶められているとグセイノフは主張する（66-67）。

もう一つのヴァリエーションは、ソルジェニーツィンが暴いたとされる言語現象である。ソルジェニーツィンが収容所に入っていたとき、そこには「売国奴」（изменники Родины）としてソ連に戻ってきた元ドイツ軍捕虜の囚人たちがいたが、この《изменники Родины》（売国奴）という言葉がこの場合イデオロギー素となるとされる。ソルジェニーツィンによれば、ロシア語として正しくは《изменники Родины》のように「祖国」という語が「与格」とされなければならない。しかし、実際には《изменники Родины》と「生格」で置かれることによって、「祖国を裏切った者」ではなく、「祖国が裏切った者」という意味になってしまうとソルジェニーツィンは主張するのだが、まさにそれによってソビエト社会の嘘が暴き立てられることになるとグセイノフは言う（67-68）。

また、文法レベルのイデオロギー素として前置詞の選択の問題も取り上げられている。「ウクライナで」と言う場合に、従来のロシア語のように《на Украине》とするのか、あるいは独立国家となってから、ウクライナの人々が要求するように《в Украине》とするのかという問題がすでに90年代前半から議論されているが、その前置詞の選択がイデオロギー的な立場を表すことがあ

る (68-70)。

5. 人名、地名、民族名などの固有名がイデオロギー素となることもある。「サンクトペテルブルグ」という地名の変遷は一般によく知られているが、ほかにもロシア全土で同じような例が数多く見られる。それら以外の例としては、「カティン事件」<sup>19</sup>に関するソ連政府の「地名操作」の例が挙げられている。

それによると、1959年3月3日、当時の第一書記だったフルシチョフに、KGB 議長のシェレピンがカティン事件の書類を廃棄するよう提案した後に、カティンをめぐる地名の操作が始まったとされる。戦争中ドイツ軍によって焼き払われたベロルシアの「ハティン」(Хатынь) という、「カティン」(Катынь) とよく似た名前の村に、1969年に総合記念館が建てられ、その建物群には「ハティンの警鐘」(Хатынский набат) や「ハティンの煙」(Дымы Хатыни) などのように、さまざまな形で「ハティン」という言葉が付けられた。こうして、「ハティン」の名を喧伝することによって、よく似た響きをもつ「カティン」を社会の記憶から消し去ろうとしたというのである。このように、ベロルシアで焼き払われた数多くの村の一つであるハティンが、突如1960年代はじめになって、ソビエト体制の「罪」を覆い隠すシンボルとされたとグセイノフは言う (73-75)。

この解釈の当否は評者には判断しかねるが、グセイノフによれば、この「言語戦略」が功を奏したということで、同様の戦略が1990年代に今度は人名に関して用いられたという。それは1995-1996年のことである。人権問題委員会議長セルゲイ・アダモヴィチ・コヴァリョフがエリツィンと対立し、その結果あらゆるポストから解任されたのだが、当時コヴァリョフは民衆の間で非常に人気があったため、その処分に民衆の注意が向かわないように、法務大臣に同

<sup>19</sup> 第二次大戦初期にソ連軍の捕虜となったポーランド人将校が、スモレンスク近郊のドニエプル河畔にあるカティンの森で大量に虐殺された事件。ソ連は戦後からペレストロイカの時期に至るまで一貫して自らの責任を否定した。

姓のヴァレンチン・コヴァリョフが任命された。これによって、少なくともしばらくの間は、両コヴァリョフが同一人物であり、セルゲイ・コヴァリョフが解任どころか、法相へ昇進したと一般大衆に思い込ませることに成功したらしい（75）。

人名もまたイデオロギー素となり得る。よく知られた話ではあるが、1920-40年代は、例えば«Авангард»（アヴァンギャルド）、«Гертруда»（Героиня труда：女性労働英雄）、«Догнат-Перегнат»（«догнать и перегнать Америку»：「アメリカに追いつけ、追い越せ」）、«Даздраперма»（«Да здравствует первое мая»：「メーデー万歳」）、«Индустрий, Индустрия»（Индустриализация：工業化）その他、ソビエト・イデオロギーを反映し、また多くは略語を基にして新しい人名が生まれた（86-88）。

このような新しい人名は、スターリンが戦争中ロシアの民族主義的な政策を取るようになってから、ほとんど付けられることがなくなった。しかし、このような略語の名づけの伝統が消え去ったわけではない。20年代から30年代にかけてこのような名前を付けられた子供たちが成長することによって、ある意味スターリン時代が復活し、略語の人名もまた復活するのである。70-80年代はこの伝統はわずかに認められるだけだったが、エリツィンが政権についたときに完全に蘇る。ボリス・エリツィンのフルネーム«Ельцин, Борис Николаевич»の頭文字をとった«ЕБН»という、«ебнуть»その他の卑猥な言葉を連想させる略称が生み出されたのも、スターリン時代の名づけ行為の伝統の延長にあるとされる（89-90）。

そのほかにも、20世紀後半には話し言葉の中で、略語で遊ぶという行為が非常に広まったことに触れられている。20世紀をとおして、まずイデオロギー素が略語化され、今度はその略語を本来とは別のものとして開く、という図式で言葉遊びが行われた。例えば、ラーゲリの中で行われていた遊びの例が挙げられる：

«Объединенное Государственное Политическое Управление»（合同国

家政治保安部) → ОГПУ → «О, Господи! Помоги Убежать» (ああ神よ! 逃亡を助けたまえ) (92)

このような言語の遊びは何世代かの間にロシア語話者が獲得してきた言語経験の一部であり、それがソ連崩壊後、言語が自由になったときに表面化し、上記の«ЕБН»などの卑俗な略語の氾濫に結びついているという。

名前をめぐるソビエト、ロシアの言語活動は貨幣の分野にも及んでいる。貨幣というイデオロギー素を好まなかったボリシェヴィキが政権について以来、クーポン券をはじめとするさまざまな「非貨幣」が生み出され、ルーブルの存在を脅かしてきた。そして、ルーブルの無力さはポストソビエト時代にも再認識され、1990年代も母語話者はソビエト時代に蓄積された貨幣にまつわるさまざまな語彙を使い、さらに例えば、«рваный» (ルーブル)、«арбуз» (10億ルーブル)、«тонна» (1000ルーブル、あるいは1000ドル) などといった新しい用語も生み出している (95-97)。

次にグセイノフは組織の名称がイデオロギー素として機能する例として«ЧК» (チェカー) という語を取り上げる (98-118)。ЧКとは、一つは1917年から22年にかけて存在した«ВЧК» (Всероссийская чрезвычайная комиссия по борьбе с контрреволюцией и саботажем) 「反革命・サボタージュおよび投機取締全露非常委員会 (チェカー)」という組織の略称であり、ソビエト時代を通じて重要であったイデオロギー素である。そしてもう一つは、1996年10月11日にエリツィンによって創設された«ВЧК» (Временная чрезвычайная комиссия по укреплению налоговой и бюджетной дисциплины) (税および予算の規律強化臨時非常委員会) の略称である。

本書によれば、チェカー自体は革命直後約5年ほどしか存在していなかった組織であり、その後を引き継いだ他の懲罰機関が他の名称を与えられたにもかかわらず、ЧКという組織名や чекист (チェカー職員) という単語はその後に使われ続けた。そして、例えばチェカーの後を引き継いだ組織«ГПУ»の職員を表す гепеушник という語が、この組織に否定的な態度を取る人によって

否定的なニュアンスを伴って用いられたのに対し、чекист はそうではなく、一般には親しみをこめて用いられることが多かったほどであるという。だから、1990年代の半ばになって、税金取締の組織に ВЧК という名称が与えられたのは、このようなポドテキストが背景にあることが理由の一つであると考えられるのも故なしとしない。1996年に ВЧК ができたとき、ロシア人の間には二重の反応があったと言う。聴きなれた言葉に喜ぶ古い人たちがいた一方で、行間を読むことになれた人たちはそこにソビエト体制の復活という不穏な空気を読むのだ。

また、「銃殺」(расстрел) というイデオロギー素にも触れられる(119-129)。ソビエト社会における「銃殺」は単なる法的措置ではない。スターリン時代あまりにも簡単に行われたこの出来事は、「法廷外の」、「不可思議な」権力の行使というポドテキストをもつ。

6. 第2章の最後に、イデオロギー素としてのスターリンの言葉が取り上げられる：「生活が良くなった、同志たちよ、生活が楽しくなった」(Жить стало лучше, товарищи. Жить стало веселее)、「カードルがすべてを決定する」(Кадры решают все)、「兄弟姉妹たちよ！」(Братья и сестры!)、「これはゲーテの『ファウスト』よりも立派だ：愛は死に勝つ」(Эта штука посильнее, чем «Фауст» Гёте: любовь побеждает смерть)<sup>20</sup>。

形式的に見れば、スターリンの言葉の引用は、マヤコフスキーやイリフ＝ペトロフの作品からの有名な言葉や映画の台詞などの引用となんら変わるころはない。しかし、1930-50年代前半に絶対的な存在であったスターリンが、ソビエト社会においてその後の20年間で急激に否定的に捉えられるようになって

<sup>20</sup> 「生活が良くなった、同志たちよ、生活が楽しくなった」は1935年11月17日の第1回全ソ連邦スタハーノフ運動者大会での演説の中の言葉、「カードルがすべてを決定する」は1935年5月4日のクレムリン宮殿での赤軍大学卒業式での演説の中の言葉、「兄弟姉妹たちよ！」は大祖国戦争が勃発した直後の1941年7月3日のラジオ演説の中の言葉、「これはゲーテの『ファウスト』よりも立派だ：愛は死に勝つ」は1931年10月11日にゴーキーのおとぎ話『少女と死』に記された献辞の言葉である。

たという背景のもとでは、他の言葉とは同列に論じることが出来ない。スターリン時代の記憶が残っている間であれば、引用のたびに、過去の記憶がよみがえるであろうし、またときには嘲るような笑いが伴う場合もある。さらに、ソビエト体制の中でも特に大きな意味をもった存在であったために、スターリンの言葉はコマルとメラミッド、ブリゴフ、キビーロフなどのソツツアート、コンセプチュアリズムなどのトポスともなったことが指摘されている。

7. 本書第3章は「イデオロギー的言語の卑俗語の層」(«Матерный пласт идеологического языка»)と題され、卑俗語に関するさまざまな考察にあてられている。

ソビエト時代、公式的には卑俗語というのはあってはならない言語現象であった。ソビエト社会では人間の生理現象に対するタブーが非常に強くなっていき、卑俗語の使用に関しても非寛容になっていく。ここで言う「卑俗語」(мат)とは、男女の性器や性行為を表すいくつかの語と、それらの基本語から派生したさまざまな語からなる体系をもった下位言語であり、これは他の単なる「俗語」とは異なり、完全なるタブー語である。

このように、言葉の規範化を強く求めるソビエト社会において、卑俗語というのは決して表面に出てくる言語現象ではなかったが、しかしながらペレストロイカ期以降、言論の自由化と共に卑俗語の使用が一気に表面化し、メディアにも盛んに登場するようになった。卑俗語の使用に反対することは、ペレストロイカの時期には、グラスノスチ自体に反対する印ですらあったという(146)。1990年代初頭にはゴルバチョフやロストロポーヴィチなどの有力な人物が公の場で発した卑俗語がメディアで伝えられ、卑俗語に対する規制がますます緩んでいく。

学問の分野でも、1980年代半ばごろから、ボリス・ウスペンスキーの諸論考<sup>21</sup>をはじめとして、卑俗語の起源を古代の農耕儀礼に求めるような研究が出

<sup>21</sup> ここで念頭に置かれているのは、卑俗語研究の最も基本的な文献である Успенский, Б. А.



されてきた。しかし、グセイノフによれば、それらの多くは卑俗語を生きた言語の重要な現象の一つと見なすのではなく、卑俗語を用いた言語活動を反文化的な行為と見なしており、このようなアプローチのみでは結局「偉大で力強いロシア語」という教条を反復するだけになってしまう（153-154）。グセイノフが関心を向けるのは、ソビエト時代、あるいはポストソビエト時代のロシア語における生きた現象としての卑俗語なのである。

8. グセイノフによれば、ソビエトのイデオロギー的言語の中で卑俗語は三つの形式で存在していた。

第一の形式とは、党のエリートたちが互いに集団内部で用いるものであり、プーシキンやドストエフスキー、トルストイ、ゴーリキーなども描いている革命前のロシアにおける卑俗語の伝統的な機能と同じである<sup>22</sup>。一般的には、ラーゲリなどよりもむしろ党幹部同士の親密な会話の方が卑俗語が多く聞かれたという。

第二の形式とは、昔から存在する庶民のジャルゴンである。ソビエト時代のジャルゴンは、意味的には空虚であり、用いられる場面が非常に広く、喧嘩ではなく、普通に親しげに話す会話の中で、挿入語として用いられるようなものが多い。そして、イデオロギーの言語が増大するにつれて、この全民衆的な卑俗語も拡大した。

第三の形式とは、一種のマスゲームとしてのあり方である。大衆全体のゲームであるために、子供時代に積極的に卑俗語を使わなかった人であっても、場面によっては使わざるを得ないということもある（148-151）。

卑俗語の語彙の構成を確認しておこう。最も基本となる語は男性性器を表す

---

Мифологический аспект русской экспрессивной лексики // Избр. труды: В 2 т. М., 1997. Т. 2. с. 67-161 である。

<sup>22</sup> この点に関しては、例えばゴーリキーがレフ・トルストイを訪ねたときに、トルストイがゴーリキーを「仲間」と思っていることを示そうとして、上流階級で普通に用いられているようにあえて卑俗語を用いた、というエピソードもある（Руднев 2001: 30）。

«хуй»、女性性器を表す «пизда»、性行為を表す «ебать» という語であり、そこからさまざまな接頭辞、接尾辞を用いていろいろな派生語が生まれ、体系的な下位言語を構成する。重要なのは、これらが必ずしも「罵り言葉」としてのみ用いられるのではなく、卑俗語のみを用いながらかなり複雑な命題をも述べることができるという点である。つまり、卑俗語とは、自然言語の一種の代替言語なのであり、だからこそ、「イデオロギーの言語」の完全なる対立物となり、「イデオロギー的言語」の一部を構成するのである<sup>23</sup>。

このような卑俗語を使ったタイプの発話をグセイノフはギリシャ語の語彙素を用いて「エスフロフェミズム」(эсхрофемизм) と名づけ (157)、これをまったく新しいタイプの発話だとする。例えば、「остолбенеть」(あっけにとられて棒立ちになる) という普通の語から、「опизденеть」という卑俗語が生まれる («пизда» が語根)。後者の基本的な意味は前者と同一だが、しかし卑俗語としての発語内的力<sup>24</sup> はそのまま保たれている。この派生の過程はおおよそ次のような図式で表される。

① «о-», «за-», «под-», «раз-» その他の接頭辞

② 普通の語に類似した卑俗語

③ 卑俗語の意味を普通の語の意味で置き換え、普通の語の意味構造と卑俗語の発語内的力を保ちながら、新しい語が生み出される (159-160)

このように、対応する日常語と基本的な意味は同じでありながら、卑俗語としての情緒的な意味やニュアンスを有することによって、これらの卑俗語は

<sup>23</sup> 「イデオロギーの言語」と「イデオロギー的言語」の違いは本稿2の記述を参照のこと。

<sup>24</sup> ここでグセイノフは「発語内的力」(иллокутивная сила) というオースティンの「言語行為論」の用語 (illocutionary force) を用いているが、実際には「発語媒介的力」(perlocutionary force, перлокутивная сила) と捉えることも可能であるように思われる。本書ではどちらの「力」と見るかが特に大きな意味をもつわけではないため、本稿ではこの点に関して踏み込まないが、ロシア語の卑俗語の使用を言語行為論の観点からどう説明できるのかは興味深い問題であり、その考察は今後の課題としたい。

「裏のイデオロギー」として機能するのである。

9. 卑俗語が用いられる代表的なジャンルに、政治チャストゥーシカ<sup>25</sup>があり、そこでは例えば国家の指導者をはじめとする政治家が象徴的に描かれる。グセイノフが挙げるフルシチョフの例を見てみよう。

Вышла б замуж за Хрущева,	(フルシチョフと結婚できたらいいけど)
Побоялась одного:	(一つ怖くなったの)
Говорят, что вместо <b>хуя</b>	(チンチンのかわりに)
Кукуруза у него. (166)	(トウモロコシがついているという話だもの)

ここでは卑俗語は罵詈雑言の機能を果たしておらず、フルシチョフの政策を笑いものにするために使われている。つまり、フルシチョフが国家予算を「トウモロコシ」や「宇宙開発」につぎ込み、国家財政を疲弊させたことに対する嘲笑である。このように、このチャストゥーシカは同時に「滑稽」であり、「真実味」があり、そして「危険」なものであるという（169）。ここで「危険」だというのは、指導者批判に伴う「危険性」があるという意味であろう。

チャストゥーシカで歌われる対象は政治家ばかりではない。

Над селом <b>хуйня</b> летала	(村の上をばかげたものが飛んでいた)
Серебристого металла.	(銀色の金属製のものが。)
Много стало в наши дни	(最近はすっかり増えてしまった)
Неопознанной <b>хуйни</b> ! (166)	(未確認のばかげたものが!)

この背景にあるのは、1960年代半ばに科学技術者や文学者のインテリゲン

<sup>25</sup> チャストゥーシカとはロシアの民衆詩歌の一形式で、19世紀後半に成立したと言われる比較的新しいジャンルであり、フォークロアの多くのジャンルが衰退に向かった20世紀にあって、むしろ大きく発展したと言われる。

ツィアの間で UFO 信仰が広まったことである。ここで用いられている хуйня という卑俗語は、その UFO 信仰に対して疑義を呈するだけでなく、「ばかげたこと (хуйня)」を見極めることの出来ないインテリゲンツィアの無力さというイデオロギー素ともなっている。

そして注意すべきは、公的なメディアはそもそも卑俗語を用いることができないため、直接卑俗語のチャストゥーシカを名指しで批判することができないということである。また同じことは、チャストゥーシカのほかに、アネクドートや、諺のもじり、しゃれなど、さまざまな口頭のジャンルにも言える。

#### 10. グセイノフはいくつかの卑俗語のタイプを挙げている。

一つは、ソビエトのさまざまな集団の上司が、部下を自分にひきつけるために用いるというものである。それは、ちょうど上司が部下に対して «ты» (親称の二人称) を用いるのと同じような機能を持つ。「お前の前では自然体で、卑俗語だって使うんだぞ」ということを示しながら、関係を近づけようとするということである。

また、特別に作家や役者、芸能人などの文化人の卑俗語も取り上げられている。特に革命直後には古い体制からの完全な解放のシンボルとしても卑俗語は機能したのだが、そのときにとくに作家や役者などのインテリゲンツィアが大きな役割を果たしていた。ソビエト社会で言語の「純化」が叫ばれ、卑俗語が抑圧されてからも、文化人の卑俗語のポドテキストは独自の芸術手段としてソビエト社会の日常生活の中に残り、60年代以降は文化人の卑俗語のポドテキストに「解放感」、「内省や疑念からの解放」、「実行性」などの概念が含まれるようになったという (180)。ペレストロイカ期以降は、庶民の卑俗語と文化人の卑俗語が混じりあい、その中で渾然となった「卑俗語」が民主主義自体を象徴するようになる。

また、いわゆる「雪解け」の時代の卑俗語に関する記述も興味深い。まず、卑俗語と公式言語のイデオロギー素は「生」と「死」という対立で捉えられ、フルシチョフ時代の文学においては卑俗語が自由のシンボルとして用いられる

ということがあった。しかしその一方で、雪解けの時代そのものの自由の象徴として、公式的な言葉の中に卑俗語が入り込んでいた場合もある。例えば、多くの人が言及しているとおり、フルシチョフが1963年に抽象芸術の作者のことを卑俗語を使って«пидарасы»（ホモ）と呼んだという。

11. 上でも触れたとおり、ポストソビエト時代、卑俗語は日常生活の中に広範に広まった。例えば、«кого ебёт чужое горе?»（他人の不幸など糞食らえ）というイデオロギー素は、「ソビエト人民の全国民的な団結」という公式的な（見せかけだけの）イデオロギー素と表裏一体の関係にあり、非公式な定式として存在していたのだが、それが（ポスト）コンセプチュアリズムの詩人チムール・キビーロフのおかげで公の一般的なディスコースの中に登場するようになった。

Слышишь, капает кровь? （血が滴るのが聞こえるか？）

Слышишь, хлюпает кровь? （血がびちゃびちゃするのが聞こえるか？）

Слышишь, темною струйкой течёт? （血が黒く流れるのが聞こえるか？）

Слышишь, горе чужое кого-то **ебёт**? (214) （他人の不幸など糞食らえ。）

ソビエト時代には、公式的ディスコースと非公式的なディスコースの区別が基本的にははっきりしており、卑俗語は「裏のイデオロギー」としてのみ機能していたが、その区別が無化された現在、卑俗語はイデオロギー的超テクストの中だけにその問題が求められるわけではなくなったということである。

グセイノフはロシア語における卑俗語のメンタルマップを挙げている(215)。それによれば、卑俗語は、「おもしろさ」対「おそろしさ」というカテゴリー、そして「日常的なナンセンス」対「質素だが守られた日常」というカテゴリーの緊張関係の軸の中で用いられる。そして、「規範的」と「非規範的」という基準がはっきりしていたソビエト社会では、「おもしろさ」と「おそろしさ」が混同されることはなかったが、ソ連崩壊後の現在、これらが入り乱れ

ながら展開しているという。

12. 以上、簡潔に本書の内容を、特に「ソビエト語」問題に関する点を中心にしながらまとめてきた。

「ソビエト語」研究は、一般に細かな分析になればなるほど、扱い得る対象は極めて限定され、逆に範囲を広げれば広げるほど、分析の精度は落ちていく。そのような「ソビエト語」研究の中で本書がもつ最も大きな特色は、非常に広範な言語レベルを扱いながら、分析は細かく、イデオロギー素の背後にあるポドテキストを丹念に読み込んでいくところにある。それは非常に緻密な読解であり、実際に「ソビエト語」の中を生きた母語話者にしかなし得ない分析であろう。

分析レベルの問題として特に興味深いのは、(分析の可否はともかくとして) 本稿5で触れた「カティン」と「ハティン」をめぐる言語戦略の分析である。従来の言語学的な「ソビエト語」研究においては、目の前にテキストとして存在する言語資料を基本的にはそのテキストに内在しながら分析するのが普通であり、このような国家的な「名づけ」という言語活動のレベルでの戦略はあまり視野に入ってこなかった。このレベルの分析には必然的に国家的な政治戦略や社会的な事実関係などの知識が不可欠となるが、「ソビエト語」研究にはもっとこのレベルの分析があるべきだと思われる。

また、本書に「卑俗語」(мат) という言語現象の分析が含まれていることも大きな特徴の一つであろう。近年では卑俗語の辞書や研究書なども出版されるようにはなったが、「ソビエト語」という問題設定の中で本格的に論じたものは、管見にして本書以外に知らない<sup>26</sup>。ロシア語の卑俗語は、単に個々の単語が罵り語として用いられたというようなものではなく、いくつかの卑猥な語

<sup>26</sup> クーピナの著書『全体主義言語』(Купина 1995) では、抵抗の言語も扱われているが、その抵抗の言語の例の中(グベルマン作のチャストゥーシュカなど)で用いられている卑俗語に関しては、その単語を記さず「…」で代用しており、「卑俗語」そのものを論じるのが避けられている。

から自由に派生し、自然言語の代替となり得るほどの体系性を持つという特質ゆえに、「ソビエト語」の「裏のイデオロギー素」となっていたという視点は、「ソビエト語」の問題に限らずロシアの文化現象を考察する上で有益であろう。

また、本稿ではあまり触れなかったが、哲学者、文学者などのエピソードも数多く含まれており、その点でも興味深いほか、巻末に挙げられた「ソビエト語」研究に関する書誌には古い時期のものや外国のものも含まれており、かなり広い範囲に著者の目が行き届いていることが分かる。

本書はこのように「ソビエト語」研究やその他の学問分野に大いなる飛躍をもたらし得るような視点を有しているとは言え、しかしながら、この研究自体は必ずしも体系性をもっているとは言い難い。ソビエト時代と現代の話がさまざまに入り乱れ、論旨が明快ではないということもあるが、最も大きな不満は、抽出されるイデオロギー素も、そこで読みこまれるポドテキストも、また卑俗語にしても、雑多なエピソードとその読解がただ提示されるだけであって、それらの間の内的な関連性が見えてこないというところにある。例えば、本稿4で触れた東西ドイツのロシア語名称のエピソードと、ソルジェニーツィンが暴いて見せた「祖国の裏切り者」に関するエピソードの間に関連性を見出すのは困難であり、またそれぞれが全体の見取り図の中でどこに位置付けられるのかも不明である。

確かに「ソビエト語」とは普通に思われているよりは雑多なものであり、なんらかの図式化を試みることは著者の意図にはないのかもしれないが、それでも個々の分析をある程度総括的にまとめる視点がもう少しはっきりと提示されてもいいように思われる。例えば、エストニアの首都タリンを Таллин と書くのか、Таллинн と書くのかという点、「ウクライナで」と言う場合に前置詞の в と на のどちらを使うのかという点、そしてロシア語のアルファベット自体が旧ソ連の他民族にとってはマクロなイデオロギー素となったという点などは、旧ソ連を構成していた共和国をめぐるイデオロギーの問題として同列に論じられてしかるべきであろう。さらにまた、スターリンを真似る役者が、グルジア訛りの役者からモスクワ発音の役者へと変更されたというエピソードに見

られるように、言葉をめぐってモスクワ（中央）対周縁地域というヒエラルキー構造が生み出されていたことも加え合わせれば、民族問題、地方と中央というような「ソビエト語」の一つの大きなテーマとしてもっと深く論じることができたのではないだろうか。そしてその他のいくつかのテーマをまとめれば、ソビエトのイデオロギー的言語の壮大な宇宙がもう少し明らかになり、本書の価値がさらに高まったであろうと思われる。

また、本筋とは関係ないが、誤記や誤植が散見される点は残念であった。例えば、前半部分で何度か用いられている «ономатопозэтический» は «ономас-тический» の誤記であろう。

### 【参考文献】

- Вежбицкая, А.* (1993) Антитоталитарный язык в Польше: механизмы языковой самообороны // Вопросы языкознания. 1993-№ 4, с. 107-125.
- Земская, Е. А.* (1996) Клише новояза и цитация в языке постсоветского общества // Вопросы языкознания. 1996-№ 3, с. 23-31.
- Кронгауз, М. А.* (1994) Бессилие языка в эпоху зрелого социализма // Знак: Сборник статей по лингвистике, семиотике и поэтике. С. 233-244.
- Кронгауз, М. А.* (1998) Речевые клише: энергия разрыва. // М. Я. Гловинская (ред.), Лики языка: К 45-летию научной деятельности Е. А. Земской. М.: Наследие, с. 185-195.
- Купина, Н. А.* (1995) Тоталитарный язык: словарь и речевые реакции. Екатеринбург: Издательство Уральского университета.
- Руднев, В. П.* (2001) «И это все о нем»: 'Хуй': Феноменология, антропология, метафизика, прагмасемантика // А. Плущер-Сарно, Большой словарь мата. Том первый: Опыт построения справочно-библиографичес-



現代ロシア語における「ソビエト語」と卑俗語：グセイノフ著『1990年代のロシアのディスコースにおけるイデオロギー素』に関する読書ノート（高橋健一郎）

кой базы данных лексических и фразеологических значений слова «хуй». СПб.: Лимбус Пресс, 2001, с. 16-34.

*Русский язык конца XX столетия (1985-1995).* (1996) М.: Языки русской культуры.

高橋健一郎（2002）「ソビエト全体主義社会の言語に関する社会言語学的研究」／社会言語科学会『社会言語科学研究』Vol.4-2、42-56頁

高橋健一郎（2004）「『ソビエト語』の諸問題——全体主義社会の言語に関する理論的考察の試み」／『文化と言語』第60号、173-222頁

高橋健一郎（2005）「1930年代後半の『ソビエト語』の言説空間の分析」博士学位論文（東京大学大学院 言語情報科学専攻）